

Ⅱ 各教科の正答率、問題の内容及び所見・解説

1 国語

(1) 正答率

問 題		配 点	正 答		一部正答		誤 答		無 答		通 過 率
			数	率 (%)	数	率 (%)	数	率 (%)	数	率 (%)	率= $\frac{\text{得点計}}{\text{(人数} \times \text{配点)}}(\%)$
1	問 1	4	225	55.4	0	0.0	179	44.1	2	0.5	55.4
	問 2	6	143	35.2	227	55.9	22	5.4	14	3.4	64.7
	問 3	4	233	57.4	0	0.0	173	42.6	0	0.0	57.4
	問 4	7	109	26.8	205	50.5	54	13.3	38	9.4	54.6
	問 5	5	176	43.3	72	17.7	157	38.7	1	0.2	52.7
2	問 1 (1)	2	200	49.3	0	0.0	196	48.3	10	2.5	49.3
	問 1 (2)	2	255	62.8	0	0.0	139	34.2	12	3.0	62.8
	問 1 (3)	2	250	61.6	0	0.0	142	35.0	14	3.4	61.6
	問 1 (4)	2	261	64.3	0	0.0	97	23.9	48	11.8	64.3
	問 1 (5)	2	355	87.4	0	0.0	15	3.7	36	8.9	87.4
	問 2	3	152	37.4	3	0.7	247	60.8	4	1.0	37.8
	問 3	3	121	29.8	0	0.0	283	69.7	2	0.5	29.8
	問 4 (1)	2	384	94.6	0	0.0	21	5.2	1	0.2	94.6
	問 4 (2)	3	312	76.8	0	0.0	68	16.7	26	0.2	76.8
	問 4 (3)	3	264	65.0	17	4.2	83	20.4	42	10.3	67.7
3	問 1	4	277	68.2	0	0.0	127	31.3	2	0.5	68.2
	問 2	4	309	76.1	0	0.0	95	23.4	2	0.5	76.1
	問 3	7	121	29.8	159	39.2	65	16.0	61	15.0	53.0
	問 4	4	240	59.1	0	0.0	154	37.9	12	3.0	59.1
	問 5	7	68	16.7	162	39.9	109	26.8	67	16.5	38.2
4	問 1	3	230	56.7	0	0.0	170	41.9	6	1.5	56.7
	問 2	3	149	36.7	13	3.2	220	54.2	24	5.9	38.3
	問 3	3	86	21.2	59	14.5	186	45.8	75	18.5	28.5
	問 4	3	143	35.2	1	0.2	194	47.8	68	16.7	35.3
5		12	68	16.7	315	77.6	12	3.0	11	2.7	68.5

(小数第2位を四捨五入しているため、%の合計が100にならない場合がある。)

(2) 問題の内容

- ① 出典は逸木裕著『風を彩る怪物』である。問題文として使用した箇所は、姉の住む奥瀬見で、オルガン製作を通じて音楽と向き合っていた「私」（陽菜）が、高校生の「玲ちゃん」の個性的な演奏を聴いて、コンタクトのときに直面した、自らに音楽的な個性がないという問題を思い出す場面である。文章は本章における主人公である「私」の視点から描かれており、「玲ちゃん」の演奏を通じて変化していく「私」の心情を、本文中の描写や心内文などを踏まえながら丁寧に読み取ることが求められる。
- ② 漢字の読み書き、基本的な文法の知識（主語と述語の関係）、俳句に表現された情景、インタビューとそのメモの内容について解答する問題である。
- ③ 出典は川瀬和也著『ヘーゲル哲学に学ぶ 考え抜く力』である。問題文として使用した箇所は、「何かが存在するとはどういうことなのか」という問いに対して、筆者がヘーゲルの考え方を基に論じた部分である。対象を「個物」と「普遍者」に分け、「輪郭による空間的な区別」によって「存在する」場合と「他の性質との概念的な区別」によって「存在する」場合があると述べた本文の内容理解のためには、キーワードを手掛かりにしながら、筆者の論理の展開の仕方を的確に捉えることが求められる。
- ④ 出典は浅井了意著『浮世物語』である。問題文として採用した箇所は、「自慢するは下手芸とい

ふ事」の全文である。文章は全体として平易な表現で記述され、内容にも一貫性がある。現代語訳や語注を手掛かりとしながら、文章に描かれている情景や登場人物の心情などを想像することが求められる。

- 5 資料は、内閣府の令和3年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」をもとに作成されたグラフである。全国の満10歳から満17歳の青少年を対象にした調査資料をもとに、「インターネットの適切な利用」について自分の考えが相手に効果的に伝わるよう、自己の体験を踏まえ、展開を工夫して書く力をみようとした。

(3) 所見・解説

- 1 文学的な文章を理解する力をみようとした問題である。

問1 文章の内容を捉え、登場人物の心情を読み取る力をみる問題である。ここでは、冒頭に示されたあらすじを踏まえつつ、傍線部①の3行後「……ぶれない意志が伝わってくる。」までの部分に着目する。「私」の動悸が高鳴った理由は、「玲ちゃん」の演奏を聴いたことにある。その際「私」は、「——音大。」や「——上手い。」とあるように、玲ちゃんが音大を目指していることや、玲ちゃんの演奏には「ぶれない意思」があり、技術も優れていることに意識を向けて、心が乱されている。こうした「私」の心情について、最も適切に説明している選択肢はイである。

問2 文章中の描写に注意して読み、内容を的確に捉えて表現する力をみる問題である。ここでは、傍線部②の直前「——玲ちゃんがいるからだ。」に着目し、「玲ちゃん」がいることでどのようなことが起きているのかということを読み取る。解答につながる表現としては、傍線部②の後「玲ちゃんは精密機械のように正確にテンポをキープして、アンサンブルの土台をしっかりと支えている。対話相手が安定しているから、細田さんも安心して吹けているのだ。」がある。この表現をもとに、指示された字数と文脈に合うようにまとめる。

問3 登場人物の言動に注意して読み、その心情を読み取る力をみる問題である。主に傍線部②の8行後「——あ。」以降の表現に着目する。この場面で再発した「私」の唇の震えは、文章全体を通じて、「私」に音大受験をためらわせる要因となっている。したがって、唇の震えが再発した「私」の内心には、「音大を受験できるのか」という不安があったと考えられる。また、音大受験を〈当然〉と考えている「玲ちゃん」の質問に対する、「やっぱり、藝大かな。」という「私」の発言は、そうした「内心」を隠したものであることが読み取れる。こうした読み取りに合致する選択肢はアである。

問4 登場人物の設定の仕方を捉えて内容を理解し、条件に応じて適切に表現する力をみる問題である。本文の前半から、「私」はコンクールで打ちのめされて思い悩むうちに唇が震えるようになったことがわかる。その上で、傍線部④の3行後「玲ちゃんの、才気溢れるクラリネットが、あの日のことを呼び覚ます。私は、忘れていた。私が抱えている問題が、何ひとつ解決していないことを。あのコンクールのあと——私は、必死に〈個性〉を探した。」から、「コンクールのことが呼び覚まされたことで、自分に（音楽的な）個性がないことを思い出した」という本文全体の展開を読み取る。以上を踏まえて、指示された字数と文脈に合うようにまとめる。

問5 表現上の工夫に注意して読み、内容を的確にとらえる力をみる問題である。正答はアとエである。アは、「対句を用いて表現することで」が適切ではない。「対句」とは、形や意味の似ている二つの句を並べる表現方法のことであり、主に漢詩で用いられる。選択肢で示した箇所は「小柄な体格」と「ずしんと腹に響く芯のある音」を対比しているに過ぎず、対句を用いているとはいえない。エは、「『私』に對抗心を向ける玲ちゃんに、『私』が見下した態度で接していることを印象づけている」が適切ではない。この箇所は、「私」が「玲ちゃん」の人柄と音楽との関連について述べているに過ぎず、「見下した態度で接している」と解するのは適切ではない。また、「玲ちゃん」が「私」に對抗心を向けているような表現は、本文中にはない。

- 2 基礎的・基本的な言語能力をみようとした問題である。

問1 基本的な漢字の読み書きの力をみる問題である。

(1)の「吐露」は、「おうろ」「はくろ」など「吐」の読み誤りが多かった。また(4)の「財布」は、「財袋」もしくは「銭袋」と書いたもの、無答のものなど、誤答が多岐に渡っていた。日常生活の中で比較的触れる機会の多い字でも、漢字の表意性に頼るのではなく、様々な文章に触れることで語彙を増やしていくなど、学習を工夫することが必要である。

問2 基本的な文法の知識(主語と述語の関係)についての理解をみる問題である。正答は「**機会**」である。「期間中は」「練習試合などは」とする誤答が多く見られた。主語に伴う助詞は「は」「が」だけとは限らず、「も」「こそ」なども主語に付く場合がある。まず文の述語(どうする、どんなだ)を見つけてから、述語に対する主語(何が、誰が)を探すことが大切である。また、「電車に乗る機会も」といった複数の文節で書かれた誤答もみられた。国語を正確に理解し適切に表現するために、主語と述語の関係を理解し、活用できるようにしていくことが大切である。

問3 俳句に表現された情景を捉える力をみる問題である。俳句には、情景や季節等を表現するための「季語」があり、季語を理解することでさまざまな情景が読み取れる。正答は**イ**の「天河」、季節は「秋」である。誤答である**ア**の「夏草」、**ウ**の「五月雨」、**エ**の「蟬」はすべて「夏」の季語。時間の経過や世代による言葉の違いについて理解して情景を想像し、語感を磨き語彙を豊かにすることが大切である。

問4 話合いの話題や方向を的確に捉える力と、論理的に考え表現する力をみる問題である。

(1)は、**インタビューの様子**中のAさんとB店長の会話の場面において、次のやりとりがみられる。

B店長「この商店街は長い歴史があるため、伝統のあるお店がたくさんありますよ。通りの中心にあるパン店のあんパンは、五十年以上売れ続けている人気商品です。」
Aさん「それはすごいですね。わたしも以前食べましたが、すごくおいしかったです。何か特別な工夫があるのでしょうか。」

また、商店街の地図について話題が出たときも、「手書きのイラストやコメントがたくさん入っていて、とても見やすい地図ですね。これはどこで手に入れることができるのでしょうか。」と発言しており、相手の回答を受けて、より詳細な内容についてたずねている様子がみられる。正答は**ウ**である。

(2)「ぶらぶらと歩く」という意味をもつ熟語は、**インタビューの様子**の中では「**散策**」のみである。

(3)**インタビューの様子**と【メモ】の内容を照らし合わせると、「商店街のお祭り」の記述が【メモ】のみにあることがわかる。そこで、この内容に矢印でつながっている「商店街全体の一体感が不足」に注目する必要がある。具体的なやりとりは以下のとおりである。

Aさん「わかりました。次に、商店街の今後の課題について教えてください。」
B店長「課題としては、商店街全体での一体感が少し足りないことでしょうか。また、一部のお店では、技術を受け継ぐ若い世代の人がいないという問題があるようです。」
Aさん「それは、今後社会へと出て行く私たちにも関係のある問題ですね。」

「一体感の不足」は「商店街の今後の課題」という話題の中で出てきたものであり、「課題」の解決策として提示されたものであることが考えられる。そのため、B店長に問いかける言葉は、正答例「商店街の一体感を強める方策は何かありますか。」のようになる。

3 説明的な文章を理解する力をみようとした問題である。

問1 文章に書かれている内容を正しく読み取り、理解する力をみる問題である。傍線部①に含まれる「これ」は、「普遍者」のことを指し、多くのものが共有する性質のことである。これに対し「個別者」は、傍線部①に続く「白いものはたくさんあるのに対し、いま私が持っている白い消しゴムは一つしかない。」にみられるように、「白さ」と異なり、個別具体的なもので一つしか存在しないと筆者は述べている。この読み取りに合致する選択肢は**ウ**である。

問2 主張と例示との関係を捉え、内容を理解する力をみる問題である。傍線部②の理由は、その次の行に「しかし、『白さ』そのもの、『白い』という性質そのものを見たことがある人など

一人もいない。」とあるように、「性質そのもの」は見ることができないからである。この読み取りに合致する選択肢はエである。ア「明確な答えをもっていない」、イ「客観的に判断する手段をもっていない」、ウ「すべてを比較することができない」は、いずれも本文中で述べられていないことであり、「判断することは難しい」理由として適切ではない。

問3 文章の論理の展開を捉えて内容を理解し、条件に応じて適切に表現する力をみる問題である。傍線部③に指示語が用いられていることを踏まえ、その直前にある形式段落に着目する。筆者は、傍線部③の5行前「『白い』という性質が**存在**しないとしたら……私の消しゴムとホワイトハウスが共通して持つものなど何もない、ということになるだろう。」としている。その上で、傍線部③の2行前「『私の消しゴムも、ホワイトハウスも、同じ白という色を持っている』という当たり前に思われた事実が、**説明不可能**になってしまわないだろうか。」と述べている。これを踏まえ、指示された字数と文脈に合うようにまとめる。

問4 文章全体と部分との関係に注意して読み、内容を正確に理解する力をみる問題である。ここでは、ヘーゲルの存在論について述べた形式段落8～11に着目する。「他のものと区別されているとき」にもものは存在するというヘーゲルの考えを、筆者は「机の上に載っている消しゴム」を例として、「輪郭によって周囲のものや空間と区別されることで、消しゴムというものの在り方が定まる」と解説している。これを逆に考えれば、「消しゴムの在り方が定まり存在できるようになるためには、消しゴムと区別される周囲のものや空間が必要」ということになる。これが、傍線部④における「そのもの以外に目を向ける必要がある」理由となる。この読み取りに合致する選択肢はイである。

問5 複数の情報を整理しながら内容を理解し、条件に応じて適切に表現する力をみる問題である。空欄 **I** については、個物の存在の仕方に関して述べた形式段落9～11に着目する。個物の存在については、形式段落9において、「輪郭」がキーワードとして示されている。そして、輪郭によって空間的に区別されることで、個物は存在できると述べられている。空欄 **II** については、普遍者の存在の仕方に関して述べた形式段落12～15に着目する。普遍者は「ここで『白い直方体の消しゴム』の存在を可能にしている区別は、……性質に関わる、概念的な区別である。」とあるように、性質によって概念的に区別されることで、存在することができる。以上を、指示された字数と文脈に合うようにまとめる。

4 古典を理解する基本的な力をみようとした問題である。

問1 文章に書かれている内容を、叙述に基づいて的確に捉える力をみる問題である。傍線部①を含む文及びその直前の文から、ふすまに白鷺だけの絵を描くことを望んだのは「ある人」であると考えられる。この「ある人」は、傍線部①の次の行「亭主のいはく、『いづれも良さうなれども、……飛ばれまい。』」や、傍線部①の4行後「亭主これを見て、『あれ見給へ。あのやうに描きたいものぢや。』」から、「亭主」のことであると判断することができる。正答はエである。

問2 歴史的仮名遣いについての理解をみる問題である。正答は「はづかいがかようでは」である。「づ」については、「羽づかい」が「羽の使い方」の意味であることを踏まえ、「指づかい」や「筆づかい」などと同様に「ず」とはしない。文語のきまりを正確に理解するとともに、古文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむことが大切である。

問3 場面や登場人物の描写に注意して読み、内容を理解する力をみる問題である。傍線部③を含む文が「いやいや此飛びやうが第一の出来物ぢや。」とあることから、「第一の出来物（もつともすぐれた点）」が指すものは「此飛びやう（この飛び方）」であるとわかる。さらに、「此」が指す内容は、亭主の「羽づかひがかやうでは、飛ばれまい。」という発言から、「絵描きの描いた白鷺」のことだと考えることができる。誤答としては「白鷺が四五羽飛んでいる様子」のように、本物の白鷺について説明してしまったものが多くみられた。

問4 古典に表れたものの見方や考え方を捉え、内容を理解する力をみる問題である。先生の言葉「後半の登場人物が『をのれの疵をかくさん』としている様子は、どこに表現されているかわかりますか。」を踏まえ、本文の後半（「ある者、座敷をたてて絵を描かする。」以降）に着目する。本文の後半は、白鷺の絵を描いてもらいたい亭主に対して、本当の白鷺が飛ぶ様子を目にしても、自分の描いた白鷺こそが本当の白鷺よりもすぐれていると絵描きが負け惜しみ

を言うという内容である。これを踏まえるとともに、Aさんの言葉「本当の白鷺を見ても、」から、I にあてはまる内容は「それがしが描いたやうには、得飛ぶまい。」であると判断することができる。

- 5 資料から読み取ったことをもとに、「インターネットの適切な利用」についての自分の考えを、構成を工夫しながら、自らの体験を踏まえて書く力をみようとした問題である。資料は、内閣府の令和3年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」をもとに作成したものである。減点となった例としては、資料から読み取ったことだけを書き、自分の体験を踏まえた考えが書かれていないものや、読み取ったことと自分の考えが関連していないといった、条件を満たしていないものが多かった。また、誤字・脱字や接続詞・助詞の誤用、言葉の使い方の間違いなども多くみられた。資料から情報を正確に読み取り、目的に応じて相手に伝わる文章を書くことができるように意識して、普段から学習する必要がある。